

古文書倶楽部

鬼義重、

剣豪に弟子入りする

【発行】

秋田県公文書館

2011.9

第42号

企画展「近代秋田の電気事業」の後期は十一月二日から公文書館二階の特別展示室、「県政映画」上映会は、同日に三階多目的ホールで開催します。皆様のご来場を、お待ちしております。

公文書館講座

アーカイブズコースが始まります

古文書とは何かと改めて問われると答に一瞬躊躇してしまいますが、古文書学では古文書の定義を「甲から乙という特定の者に対して、甲の意思を表明するために作成された意思表示手段」（佐藤進一）としています。したがって、

古文書には差出人と受取人がいることになりません。しかし、受取人が必ずしも人間とは限りない場合があります。例えば神を受取とする起請文です。宣言・契約などをする際に、それが真実であり、厳守すべきこと、違背した場合は神仏の罰を受けることを、神仏にかけて誓約する文書のことです。誓うべき事柄を書いた部分を前書、神仏を勧請してその名をあげた部分を神文といえます。

秋田藩家蔵文書には、起請文が五八通あります。そのうち今回は佐竹義重（初代秋田藩主・義宣の父）の起請文を紹介します。

写真の資料は、秋田藩士の平沢氏が家蔵していたもので、当館所蔵の平沢家文書に原本があります。無益な殺生をしないこと、師の赦しなく弟子をとらないこと、師の命に背かないこと、の三ヶ条を義重が摩利支天に誓っています。

義重は、その勇猛な性格から「鬼義重」と呼ばれ、伊達政宗を摺上原で滅亡寸前まで追い詰めたり、秋田転封後は六郷に陣取って県南の転

封反対の一揆の鎮圧を直接行っていました。この文書の宛所の愛洲氏は、初代の移香が剣術の影流（陰流）を創始し、子の宗通の弟子に佐竹義重のほかにも上泉信綱がいました。のち陰流は剣聖とよばれた上泉を経て、新陰流として柳生氏に伝えられ徳川家の剣術指南の流派となりました。



「佐竹義重起請文」
(資料番号A280-69-52-8)

愛洲氏は義重との縁で佐竹氏に仕え、子孫は秋田藩士として平沢氏を名乗りました。平沢氏からは、江戸中期に平沢常富（平角）が出ます。常富は江戸藩邸留守居役でありながら、戯作者（筆名は朋誠堂喜三三）や狂歌師（号は手柄岡持）として活躍し、山東京伝や大田南畝などとともに文学史上にその名を残しました。「武」の家から「文」が生まれた例といえるでしょう。

【佐藤 隆】

今回の公文書館講座アーカイブズコースの第一回（十月七日）では、「続・戦国時代の秋田」と題して、昨年の展示や講座では触れられなかった内容を取り上げるほか、秋田藩家蔵文書の多彩な文書群の中から、上記のような書札札に關わる文書の様式についても紹介します。

続く第二回（十月二十一日）は、『県政映画』からみる秋田の世相」と題して、昭和三十年代以降、映画館で幕あいに上映されていた秋田県のニュース映画を通して、世相の移り変わりを紹介します。

第三回（十一月四日）は、今年度の企画展「公文書館資料に見る近代秋田の電気事業」の内容をさらに詳しく解説すると共に、県指定有形文化財も含む貴重な秋田県庁の公文書から電気事業関係のものを紹介します。

最終の第四回（十一月十八日）では、「佐竹文庫、魅力再発見」と題して、秋田藩主佐竹家に伝わった文書群から魅力あふれる貴重な資料の数々を紹介いたします。昨年度に当館が『佐竹文庫目録』を刊行した際の調査の成果を元にして

います。会場は公文書館三階多目的ホールです。それぞれの回ごとの申し込みができます。どうぞお申し込み下さい。

※受付 午後一時
講座 午後一時三十分～三時三十分

古文書こぼればなし

昔物語

―藩主義宣のエピソード―

「昔物語」(A11―12―12―12―12)は、那珂忠兵衛通實が京都勤務中の、寛延四年(一七五二)二月にまとめた物語です。

巻末には、「(前略)最早六十に近く相成、末永く御奉公も難相勤候、責而御自分向々御奉公の種にも可相成哉と、若輩より承伝候義書誌候」とあり、後者には「此むかし物語ハ於京都柳之馬場通四条上ル御屋鋪ニ而書記 屋形様(通霄院、秋田六代藩主佐竹義真)御ニ被成御座候、因而太田氏御取次ニて奉御覧入、本書御納戸ニおさまり有之候」とあります。(太田氏は、太田治大夫か)

書かれています事柄は、常陸(茨城)時代から、秋田へ国替え後の、藩主や家臣などの事件やエピソード、古くからの伝承などを覚書としてまとめたものです。どうか伝承物語として読んでくだされば幸甚です。

畳表と刀

秋田藩初代藩主佐竹義宣は、普段は万事に質素であったといわれています。ある年、江戸から秋田へ下国の前に、家老の向豊前へ直書を送り、久保田城の畳替えを指示しています。畳表は太平(現秋田市太平)の百姓たちが編む「太平表」を使えとの指示です。当時は家中の者でも、主な座敷へはこの表は使わなかったといえます。だがこの物語が書かれた寛延の頃は、編み方も上手になり、大分綺麗に仕上がるように

なつたと書かれています。義宣は日頃から細かい指示を家臣に与えています。

義宣の脇差に、「夢切」と名付けられた刀が御納戸に納められていました。ある晩義宣が就寝中に、夢の中で何かにおびやかされ、夢心地で何かを切ったように感じました。

翌朝刀をみると、何の血かわからないが血が付いています。そこで家来共に、天井裏を探させると大猫が真二ツになって死んでいるのを見付けました。以来、この脇差は「夢切」と名付けられたといえます。この刀は質素な刀だったといわれています。大名の持つ刀は名刀と呼ばれる結構なものを持つのが一般的な世間の常識ですが、この「夢切」はごく普通のもので、義宣の武勇が夢の中でも切らせたということですから。これは道具の善悪ではなく、常に心を磨いていけば、義宣のように夢の中でも何事にも対応できるといふことでしょう。

義宣の寝所

義宣と父義重の時代は、大小姓御番の者が常に側近く仕えていました。寝所の蒲団もこの者たちが上げ下げしていました。しかし義宣は、大小姓たちが敷いた場所に寝ず、毎夜自分で場所を変えて寝ていたといえます。夜中に家臣が急用で指示を仰ぐときは、入口の外で申し上げていました。

ある時、番の者が大病になり薬をお願いすると、長刀の先へ薬を掛けて渡したといえます。戦国武将らしい用心深い行動をしていたようです。

鷹狩と馬

義宣は、剣術と馬術の名人だったといえます。鷹狩のときは馬で出かけ、馬上で鷹を遣ったといわれています。鷹を合わせて、雁などの大鳥を落とした時は、直ぐさま馬から降りながら只

一打ちに鳥の頭を打ち、二度打ちは決してなかつたといえます。

義宣の乗馬は、甚だ口の強い馬で、その跡で乗った者は御しにくく甚だ難儀したと、伝承されています。

義宣の声

義宣は、殊の外声の高い声質の人であったといえます。ある時、お城の出書院の下の御隅櫓で昼寝をしていたとき、櫓下の渋江内膳の門前を血刀を提げた侍が通るのを見付けました。義宣は櫓より「内膳々々」と呼びかけ「門前を人を切つて通る者がいる、早々に討ち取れ」との声が内膳邸(現ジョイナス)まで響きわたりました。このとき、向かいに屋敷を持つ梅津半右衛門が、内膳方へ来ていて、馬の爪髪を繕い拵えていました。そこで半右衛門は「私が参ります」と答えて屋敷へ帰り、家来に手配を申し付けると、自身は長刀を持ち追い駆けました。

血刀を持った侍は、浅原玄蕃という侍で、安楽院(二の丸にあった、現佐竹史料館がある)の前で喧嘩し相手を討ちとめ、亀ノ丁の屋敷へ帰るところを義宣に見付かったのです。早速、半右衛門は追い駆けます。玄蕃は抜刀のまま番所へ逃げ込み、勝手口の戸を締めその陰に隠れましたが、やがて半右衛門と切り合いが始まります。半右衛門が玄蕃と切り合い中、長刀の目釘が抜け、穂先がゆるくなり抜けそうになるので、後の柱へ長刀の石突を突き突き切り合い、ついに玄蕃を討ち取りました。

総じて、大将の諸卒を下知する時は、遠方へ響くように声の遣い方があるといえます。元気で頑強な人は、声も自然と丈夫だといえます。義宣の声は、戦場での叱咤号令で鍛えられたものでしょう。

【嵯峨稔雄】